以上、葬送と祈禱の二点を通じて、近世秋山農民の黒駒太子信仰の実態をうかがってみたが、秋山農民においては、死者や病人の罪穢滅除に願いがあり、葬送とむすんで信仰されているのも、死者滅罪による往生を目的とするものであった。さらに現世利益的な信仰は、病気平癒にあり、崇る霊の鎮魂呪術として受容されていた。そこに民族宗教の呪術性、民俗性と結合した仏教信仰の一端を表出しているが、又、このような信仰は近世一般農民のあり方と通ずるもので、あくまで生活に即した現実の信仰であったと云えよう。もっとも、秋山農民の太子信仰は、先述した如く、年忌法要や春秋二期の開帳にもみいだされるので、さらに追求されねばならないし、他の同時代農民の信仰との比較検討など、残された問題も多いが、今後の課題として考察していきたいと思う。

註

① 『日本仏教史三・近世篇』。
② 『日本庶民生活史料集成』第三巻、所収。
③ 同右第九巻、所収。
④ 『栄村史堺編』（昭39）、所収。
⑤ 同右。『秋山郷―民俗資料緊急調査報告書』（昭46）。
⑥ 山田は阿部姓の誤りといわれる（註②補註参照）。
⑦ 五来重教授「中世の聖徳太子信仰と庶民信仰」（『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究』、所収）。
⑧ 五来重教授編『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究、所収）。
⑨ 五来重教授「元極寺極楽坊の法華経と庶民信仰」（五来教授編前掲書三十五頁）。
⑩ 森口多里氏『日本の民俗3・岩手』。その他。
⑪ 柳田国男氏「毛坊主考」（『定本柳田国男集』第九巻、所収）。
⑫ 森口多里氏「マイリノホトケ補遺」（『民間伝承』十六巻七号。
⑬⑭ 註⑤に同じ。
⑮⑯ 五来重教授著『高野聖』。

『大無量寿経』における「道」の語法について

安富信哉

『大経』は「如来の本願を説くを経の宗致と為す、即ち仏の名号を以て経の体とするなり」（教巻）と親鸞によっていわれたように、浄土教の根本経典であり、本願力によって人間が現実世界を生きぬいてゆく原理を明らかにしたものである。したがって本願について、建立の意義、その本質、本願と本願との相互的関係などを直接に研究することは、『大無量寿経』の真髄を理解する上において欠かせないテーマとなっている。

しかしながら、本願の深奥に更に深く達するためには、側面的に考究されなければならない数々の問題がある。その一つとして、従来『大経』の「自然」の意味について度々論究されてきた。それは親鸞において、「自然」の本質が深く問われ、晩年の

親鸞の宗教体験の究極が「自然法爾」というところに帰着したからに他ならない。だがしかし、ここでもう一つどうしても解明されなければならないのは、「道」の概念ではなかろうか。周知のように、『大経』によれば釈尊の出世本懐は「道教を光闡して群萌を拯う」ことにあったと説かれている。また『大経』の異訳である『大阿弥陀経』は、正しくは『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』と呼称されるが、衆生済度と人道を説くのがこの経の本意であることが題目によって知られる。すなわち『大経』とは別な角度から見れば、「道」を明らかにした経典であるということもできるのではないだろうか。『大経』にあっては「道」という語は実に九六回の多きにわたって用いられているのである。

仏教においては、「道」は極めて本質的な意味をもった言葉である。たとえば、プラクシスは「行」という言葉をもって表わされ、テオーリアは「乗」という言葉をもって表わされるが、いずれも「道」を離れては考えられないというところに特徴がある。また仏教者にも「道」の字を自分の名前に取り入れている人が多い。たとえば、道安、道綽、善導、道元などの名を思い浮かべることができる。

ところで、八正道は仏陀の根本的な教説であるが、その場合、「道」はサンスクリットの mārga の翻訳語であるといわれる。しかし経典にでてくる「道」という言葉に対してすべて mārga の語をあてはめることは可能ではない。遺憾なことにその方面の知識はないが、「修道」という意味では有漏道も無漏道も mārga という語が用いられるが、三悪道という場合には「悪道」は apāya の翻訳語であり、六道という場合の「道」は gati で「趣」とも翻訳されている。また中道の「道」は pratipad の訳語である。

さらに『大経』にでてくる「道場樹」は「菩提樹」と同義であり、原語は bodhi-druma であり、「泥洹之道」の原語は nirvāṇa であるといわれる。

このように見てみると、仏教が中国に伝来し、経典が漢訳された時、サンスクリットの色々な概念が「道」という言葉の中に包括されてしまったと考えることができる。ここにおいて「道」の言語内容が極めて広義で豊かなものとなったことが窺われる。「道」という一つの言葉によって実に多様な事柄が表現されるのである。しかし同時に、仏教において「道」は非常に漠然とした不明瞭な意味をもった言葉となったことも事実である。それはともかくとして、「道」は東洋人、とりわけ中国人の特異な思想であって、それは西洋人の思想、特にキリスト教にはないものである。「道」をたとえば英語の way とか path に置き換えてみても、この言葉のもつ深い含蓄や背景を伝えることはできない。

さて、種々の辞典等によって調べてみると、仏教で「道」といえば、その意味内容は大体三種に分類されると考えられる。第一は、六道とか三悪道という場合で、この現実世界、衆生界を支配している法則をいう。第二は、仏果に到達するための方法をいう。すなわち八正道を始めとする仏道の実践的過程を指す場合である。第三は、無為泥洹之道とか無上正真道という場合で、仏が説き明した最も究極的な法をいう。

以上の「道」の意味内容をより明確にするために、曇鸞の『浄土論註』の助けを借りてみることにする。『論註』は『大無量寿経』の間接的な註釈書と見ることができよう。第一の世間道については曇鸞は次のように言っている。

「勝過三界道」とは、道は通なり。かくの如き因を以って、かくの如き果を得しむ。かくの如き果を以って、かくの如き因を酬くふ。因に通じて果に至る。果に通じて因を酬くふ。故に名づけて道となすと。

（聖全一・二八六頁）

この衆生世界を「道」とするのは何故か。それは三界を支配している法則が因果必然の道理、所謂「業道自然」の事実だからである。この道に住する限り、衆生は生と死の間を無限に往来し、凡夫は六道を輪廻して永遠に罪責と苦悩を享けてゆかねばならない。曇鸞は凡夫流転の実相を、尺とり虫が籠のふちを果しなく巡り、蚕が自から出した糸で自らが縛られるようなものだと言っている。

第二の仏道については、曇鸞は周知のように、龍樹の『十住毘婆沙論』によって、難と易の二つを挙げている。ここでいう「道」とは、苦悩の衆生世界から離脱する宗教的実践をいう。

菩薩阿毗跋致を求むるに二種の道有り。一つには難行道、二つには易行道なり。

（聖全一・二七九頁）

難行道と易行道の内容についてここで言及するのではない。要するに「道」という語法は、ここでは究極の彼岸である涅槃に到達するための過程を意味して用いられる。

曇鸞は浄土を「畢竟成仏の道路」といっているが、それは衆生が浄土に往生して、五念門行を修して、やがて成仏するということを意味するものである。すなわち『論註』の「善巧摂化章」の終りに、

彼の仏国は即ち是れ畢竟成仏の道路、無上の方便なり。

（聖全一・三四〇頁）

といっている。「畢竟」とはやがて必らずという意味で、浄土往生が成仏への一段階であること、換言すれば念仏が成仏道であることを示している。浄土が道であるとは、浄土がやはり究極の涅槃に到るための実践の過程であることをあらわしたものである。

第三の人間が三界のあらゆる束縛から解脱した全く自由な状態を「道」という場合であるが、曇鸞は「阿耨多羅三藐三菩提」を釈して次のようにいっている。

「阿」は無に名づく。「耨多羅」は上に名づく。「三藐」は正に名づく。「三」は遍に名づく。「菩提」は道に名づく。統ねてこれを釈して名づけて無上正遍道と為す。無上と言ふここころは、此の道は理を窮め性を尽して更に過ぎたる者なし。……道は無碍道なり。『経』に言はく。「十方の無碍人の一道より生死を出づ」といへり。道は一無碍道なり。無碍は、謂く生死即涅槃と知るなり。

（聖全一・三四六頁）

さて「道」の意味内容を曇鸞によって窺ったわけであるが、『大経』においても大別すれば三つの語法がある。『大経』にお

ける「道」の語法を論究するためのスペースはないが、同じ言葉を反復することを避けて分類すれば次のようになる。

㈠、復三悪道者。閉塞諸悪道。福応得昇善道。衆魔外道。威伏外道故。善悪之道。道路不同。生死常道。惑道者衆。下入悪道。衆道之要。展転五道。世有常道。改形易道。応至善悪之道。強奪不道。天道自然。謂己有道。五道分明。悪道不絶。入三悪道。天道施張。苦痛之道。

㈡、博綜道術。入山学道。往詣道場。度世之道。光闡道教。道場超絶。於仏正道。宣布道化。究竟菩薩道。広宣道教。究竟諸道。念道之自然。昇道無窮極。行道進徳。為道得道。精専行道。顕示大道。宣布道教。不信行道。経道漸減。経道減尽。諸仏経道。

㈢、顕現道意。往最勝道。皆令得道。正真道意。不如求道。精進求道。使立無上正真道。其道場樹。至成仏道。必至無上道。我至成仏道。志求無上道。住於無上正真道。其仏成道已来。得仏道時。所行之道。泥洹之道。具足皆得道。会当成仏道。心解得道。志崇仏道。唯楽正道。勤行求道徳。如何不求道。不識道徳。不達於道徳。教語道徳。不能得道。坐不得道。求道之時。皆令得道。従汝得道。長与道徳合明。次於泥洹之道。不信道徳。受行道法。勿犯道禁。於無上道。

一応『大経』にあらわれている「道」の語法を分類してみた。㈡と㈢については、正確に分離することは殆んど不可能である。ここでとりわけ注意したいのは、善道や天道が有漏の世間道であるといわれていることである。それで特に「天道」について、古来の中国の思想と比較して以下に考えてみたいと思うが、ともかく経典にあらわれている「道」の概念をみると、宿業の生死界も宗教的実践の過程も永遠不滅なる涅槃界も全てが「道」のカテゴリーの中に包括されているのである。このように、全く対立する異質な概念を全部ひっくるめて「道」という所に仏典を漢訳したところの人々の創意があったのであろう。人間が生きるということは何らかの意味で道を選択することであって、人間の一生、人間の行動の全体を「道」と把え、正しい道を選び、本来の道に住することを究極の課題と考えたのである。「道」は中国の古来の観念であるが、その「道」の思想を仏教は応用した。そしてそのことが中国仏教の独自性となっていることは明白である。「道」という観念を仏教の中に導入することによって、仏教は中国人の精神生活の中に浸透してゆくことができたといえるであろう。「道」は古代中国人にとって極めてリアリティをもって言葉である。

しかしここで注意しなければならぬことは、古来の中国における「道」の概念と、仏教のいう「道」の意味内容とは、色々な共通点にもかかわらず、そこに明らかな相違があるということである。古代中国人がもっている「道」の一般的なイメージを我々に呈示してくれる素材として何よりも老子を挙げることができる。「老子の思想は、道に始まり道に終る。つまり、老子の思想をつらぬくものは道であり。さらにいえば、老子の思想は道に包括される」（『老子の哲学』大濱晧）といわれる。

老子の道の思想を小論において詳細に検討する余裕はないの

で、先に述べたように、「天道」という言葉をてがかりにして『大経』と比較して、仏教と中国古来の道の思想との相違点の一端を窺ってみることにする。老子は「天道」についてどのように言っているだろうか。

「天の道は争わずして善く勝ち、言わずして善く応じ、召さずして自から来り、繟然として善く謀る」（七三章）

天の道は、あたかも水が万円の器にしたがって何の矛盾、何の摩擦も生ずることなく自由に対応し、しかも水の水たる本性を保っているように、この現象世界をつかさどり、万物を生成活動させるが、万物を自己の所有にせず、万物それぞれの自存にまかせる。しかも現象世界を統一、宇宙の秩序をまもるという絶大なはたらきをする。

「天の道は有余を損して不足を補う。人の道は然らず。不足を損して有余に奉ず」（七七章）

天の道は最高のバランス、自然のバランスである。天の道は余りあるものを損らして、足りないものを補う。しかもそれは余ったものを切りとって足りないところにつぎ足すのではない。余りあるものが自然に損って足りないところに自然にうつるのである。一方で損ることがそのまま他方で増えることになるのである。このように最高のバランスは自然の流動の中に得られる。ところが一方人間は天道を逸脱する。不定なものを損らして、余分なものを積み重ねる。天の道は自然のバランスであり、人の道は作為のアンバランスである。天道と人道は対立する。

「天の道は利して害せず。聖人の道は為して争わず」（八一章）

老子は、天の道と聖人の道は合一すると考えている。自然法則である天の道と、人間法則の体現者である聖人の道は一致するという。しかし天道と一致するのは聖人だけで、一般の人はそうではない。一般の人の生き方は作為的であり、聖人は天の道に随順した無為自然の生き方をする。

さて以上が老子の「天道」の考え方を要約したものであるが、老子はこの現象世界に高い統一を見て、そこに矛盾のない自然な姿を窺い知るのである。そしてその「天道」に人間が帰一すべき規範と法則を見るのである。

それでは『大無量寿経』においては「天道」はどのように言われているであろうか。「天道」の語そのものは『大経』下巻に二回でてくるが、老子の「天道」の意味内容とは全く違ったものであることが分る。

「天道自然にして蹉跌を得ず。故に自然の三途無量の苦悩有り。其の中に展転し、世々劫を累ね、出づる期有ること無し、解脱を得難し。痛言ふ可からず」

（五悪段・第四悪）

天地の道理は罪報自然であって、少しも蹉跌（つまずき）がない。善因には善果があり、悪因には必らず悪果がある。その因果律は人間がいくら望んでも変更できない。したがって三途（地獄・餓鬼・畜生）の人間世界にはどこまでもはかり知れない苦悩がつきまとう。『大経』にあっては、自然世界はそのまま肯定されるような理想的な世界ではない。欲望と生存競争の死闘の場であ

り、この世界に住する限り業苦を脱することはできないとされるのである。

「天道」については、更に次のように説かれている。その意味は上と同様である。すなわち、

「天道施張して自然に糺挙し、綱紀・羅網上下相応ず。煢々忪々として当に其の中に入るべし。古今に是有り。痛しい哉、傷むべし」　（同・釈尊之勤説）

業道の網は天地の間に張りめぐらされていて、業報の理はどんな微細なことにもある。この場合、「天道」といっても、六道の一つである天道だけをさすのではなく、六道の全体が天道であるということができる。そしてこの六道の世界にあっては、たとえ道徳的に善であるといわれるような行為をおこなっても、それは人間にとって究極的な救いとはならない。それとて因縁があってたまたま善行を為したのであって、やはり因果必然の道理から脱け出たわけではなく、独生・独死という人間的現実がどこまでもついて回る。このように「天道」という言葉を一つとっても、老子の思想と『大経』では全く異っていることがわかる。この相違が仏教の独自性であることは明らかであろう。人間の生の根源である「自然」を超越したものによってでなければ人間は救われないというのが仏教の論理である。

（親鸞は「道」という語を大道と小路というように区別して使っている。その意義について述べることは小論の主題からはずれるので触れなかった）